【特別寄稿】

音楽の天才の足跡

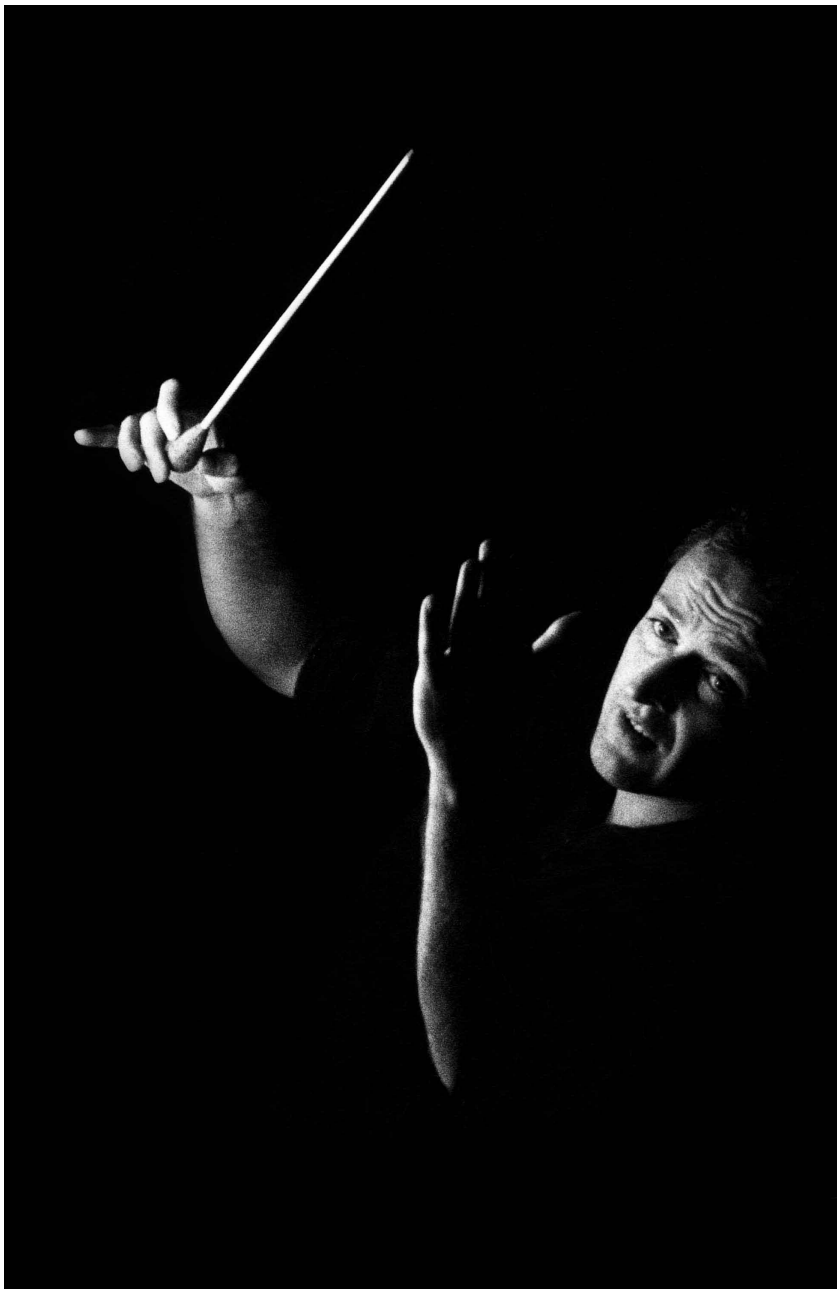
伝説のカルロス・クライバー、その名声と偉大さは死を越えて輝く

文=アレクサンダー・ヴェルナー（音楽之友社刊『カルロス・クライバー　ある天才指揮者の伝記』著者）
Text=Alexander Werner

2004年7月11日、ミュンヘン近郊のグリュンヴァルトにある自宅を出て、アウディA8でスロヴェニアに最後に向かったとき、カルロス・クライバーの胸を去来したものは何だったのか。改めて波瀾に満ちた人生を振り返ったのか。讃えられ、乞い求められ、おそらくは20世紀の指揮者の中でもっとも気難しい存在となった自らのキャリアを思い返したのだろうか。もちろん、この74歳の男は家族のこと—子どもたちと、半年前に突然亡くなったステンカ夫人のことを思っただろう。運命の打撃から彼は立ち直ることがなかった。2日後の2004年7月13日、天才指揮者は、自らの名声とは何の関わりもないコンシチャの別荘で死んでいるのが発見された。他人に自分の胸の内を明かすことがほとんどなかったクライバーは、突然の死によって、世間にもう一度謎かけをしたのだ。

1961年にザゴリェ出身のバレエダンサー、スタニスラヴァ・ブレゾヴァールと結婚して以来、サヴァ川沿いの牧歌的な風景は、クライバーにとって第2の故郷となった。彼はステンカの家では、まるで家族の一員のように感じ、寛いだ。

私が2008年8月にクライバーの人生の最後の段階に取り組んでいたとき、これらすべてのことが頭に浮かんだ。長年にわたりクライバーに取り組んできて、まるで自分がクライバーの中に入り込んでしまったように感じていた。クライバーの姪のブリギータ・ドルノフシェクが、私をリュブリャーナからコンシチャへ案内してくれた。彼女は優秀な医師であり、またカルロスをよく知る数少ない人物のひとりである。子どものころからカルロスと多くの時間を共に過ごした。うっそうと樹木の茂った丘の、絵のように美しい道を歩きながら、彼女はカルロスについてたくさんのことを語ってくれた。彼の一生を、彼女ほど正しく理解していた人物はいないだろう。クライバーは厳格な寄宿学校で過ごした青春時代がいかに不幸だったか、両親と過ごす時間がいかに少なかったかを嘆いていたという。しかしそんなときでも彼は機知に富み、楽天的で、高い知性を持つ人間ならではの喜びを見出していたことを、彼女は教えてくれた。1時間ほどして道を曲がり、小村へ通じる細い道を上っていった。小奇麗な村、コンシチャまでもうすぐだ。ここはクライバーが亡くなって以来有名になり、何千人もの人が訪れる聖地というよりは、彼の崇拝者が定期的に詣でる記念の場所のようになっている。住民たちはこの偉大な人物が自分たちの村の一員になったことを誇りに思い、来訪者を歓迎してくれる。遠く日本からでさえ人が訪ねてくる。言葉の問題はあるにしても、「クライバー」と言って身ぶりを加えれば、すぐに、教会脇の静かな墓地に連れて行ってもらえる。白い大理石できた質素な墓の上のほうに金



1971年シュトゥットガルト歌劇場での《エレクトラ》プレミエにおけるカルロス・クライバー
Foto: Werner Schloske

色で、ステンカ夫人の名前、その下にカルロスの名が刻まれ、墓前には生花が供えられている。

感動のあまり私は、この男の最後の安息の場所の前にいつまでも立ちつくしていた。思いに浸っていたが、悲しくはなかった。私のみならず、人々に多くを与えてくれたこの男への感謝の気持ちがこみ上げてきた。彼の音楽が頭の中に響き、ふとカルロスの日本の友人である佐々木忠次氏の言葉が浮かんだ。「芸術と文化は水と空気のようなものだと思います。しかし、カルロス・クライバーの音楽の場合、それに触れると、生きていて良かったと感じるのです」。

教会横にあるクライバー記念館で、私たちはクライバーが歓声の中登場するフィルムの一場面を見た。世界中のもっともすぐれたオーケストラ、オペラハウス、ウィーン、ミラノ、ニューヨーク、ロンドン、そして日本でもたびたび彼は指揮をした。頑固に世間を拒むクライバーへの圧力はますます高まり、クライバーはかつてほど表に出ることがなくなっていった。多くの伝記作家がここで暗礁に乗り上げる。芸術家として、人間として、クライバーは底知れぬ天才とみなされてきた。噂が利用されるほどに、彼のいわゆる「移り気でエキセントリックな性格」が問題になり、決まって父エーリヒ・クライバーとの関係が取り沙汰された。

それにもかかわらず、この大部のクライバー伝に取り組むことを決意したとき、私はこの暗闇に光を投げかけることができると確信していた。そして、私に執筆のための力と忍耐を与えてくれたのは、長年にわたって私を魅了し続けてきたクライバーその人だった。若い頃の私は、指揮者を集中的に聴いていて、エーリヒ・クライバーに夢中だった。だから、彼の息子のカルロスの最初のレコードを聴いたとき、それに強く惹かれたのも自然のなりゆきだった。クライバーがますます世間から身を引くようになり、レコーディング・スタジオを避けるようになると、私は世界中から彼の演奏会の録音を探した。これは伝記の調査とほぼ時を同じくして90年代の終わりまで続いた。しかしすべての苦労は私にとって幸運だった。というのも、彼の友人、近親者、仕事仲間への数えきれないほどのインタヴューと、何百という手紙や各種資料の研究を通して、クライバーについて思いがけず多くを知ることができ、彼の考えと感情に迫ることができたからだ。

クライバーが芸術家として際立っていたのは、彼が飛びぬけた才能を持っていたからだ。その才能を発揮すべく、父エーリヒ・クライバーは、中庸は決して許さないという意志のもと、早くから訓練を施した。彼の青春時代と、彼がとても尊敬していた父親を考慮に入れずに、カルロスを理解することはほとんど不可能だ。二人の関係を解読するまでには、多くの事柄が私の前に横たわっていた。しかし、信頼できる資料のおかげで私は、あらゆる手段を用いて指揮者という職業から息子を遠ざけようとした厳しい父親、という「物語」を、荒唐無稽な作り話の世界へと追いやることに成功した。結局カルロスは愛する父の足跡をたどり、意識的に偉大な手本としたのだ。

カルロスはスコアを綿密に勉強し校正して、自ら書き込みをしてよみがえらせた。彼はリズム法と精密さ、迫力あるテンポと詩的な深みにおいて、天才的な感覚を持っていた。作曲者の意図を響かせることがクライバーの心からの願いだった。そのために生き、働き、オペラとコンサートにおけるルーティンと頑固に戦い、最後はぼろぼろになった。彼はたびたび、目の前に見えている理想像に到達できないのではないかと絶望しそうになった。その理想像こそ、彼をしてグスタフ・マーラー以降唯一の真に創造的な指揮者たらしめているものだ。彼がたびたび誤解され、〝自分勝手な振る舞い〟を非難され、徐々に公から姿を消していったのも、このことが原因だといえる。

クライバーは、きわめて知的で感じやすく、陽気で自由な考えを持ち、完璧主義者で自己に厳しく、それをすべての人々に要求する人間だった。だから彼は表面的な結果に対して、年を重ねるにつれ、総じて人生にも、厳しい態度を示した。彼のひらめく熱情、ほとんど無尽蔵のエネルギー、自発性と人間性が放つ偉大なオーラ、そして才能が、音楽家をインスパイアして最高の力を発揮させた。その壮麗で美しい指揮姿がなければ、このようなたぐいまれな効果を指揮台で発揮することはなかっただろう。

クライバーが提示するテンポと、彼の内に燃え上がる炎からくる緊張感は、本番で電流が走るように解き放たれる。耳慣れた作品を新しく響かせ、人々を忘我の境地に置き去る天才音楽家。クライバーの頭の中で理想的に響いた音楽は、実際に現出したかもしれないが、それは永久に彼の秘密であり続ける。

2008年、クライバーの姪ブリギータとの別れ際に、彼女は、カルロス・クライバーが私の著書の中でとても近しい存在になった感じがしたことに強く賛成してくれた。だから最近、クライバーの80歳の誕生日を記念してリッカルド・ムーティがウィーン・フィルを指揮して開かれるコンサートの案内文を、彼女が私に依頼してくれたことがとても嬉しかった。この演奏会は6月末にリュブリャーナで開かれるが、これこそカルロス・クライバーが忘れられたどころか、今でも生き続けていることの証しである。

『カルロス・クライバー ある天才指揮者の伝記 下』
アレクサンダー・ヴェルナー著、喜多尾道冬／広瀬大介訳
四六判・上製・512頁（予定）
本体定価　3800円（予定）

昨夏刊行の上巻に続き、70年代後半から没するまでのこの天才の足跡をつぶさに追った伝記下巻、いよいよ2010年夏発売！（予定）